

# 新しい「世界文学」を構築する試み

## —堀田善衛の『歯車』を中心に—

王中忱

### 1、始めに

中国の大学における日本文学に関する講義はおもに日文科と中文科に分けられて行っている。後者の場合、殆ど比較文学或いは「世界文学」という授業科目に収められるため、日本文学は当然、「世界文学」の一環として扱われている。この文脈の中で、堀田善衛(1918-1998)の小説『歯車』は取り上げるべき作品だと思われる。というのはこの小説は国共内戦期の中国を題材とするだけでなく、中国現代文学の代表的な作家である茅盾(1896-1981)の長編小説『腐蚀』と深く関わっており、しかも作家本人が新しい「世界文学」の構図を意識しながら書いた実験的な作品だからである。言い換えれば、比較文学の授業においても、世界文学の授業においても、『歯車』は読み応えのあるテキストだと考えられる。

ところが、近年までの『歯車』を巡る論考を調べてみると、多くはこの小説のとらえた「中国題材」及び主題設定と見なされる「政治と人間」という問題に集中しており、『歯車』と『腐蚀』との関連性に関心を寄せなかったようである。先行研究のこのような状況を踏まえて、本稿は『歯車』と『腐蚀』との間テキスト性を確認しながら、「西洋かぶれの文学青年」を自認する堀田善衛が茅盾を始めとする同時代の中国文学に目を開いた意味を分析する。その上で、堀田は単に茅盾の「小説の構想」を自らの作品に取り入れただけでなく、その構想を書き換える作業によって、新たな語りの構造を作り出そうとすることを明らかにする。最後に、『歯車』を『腐蚀』の続編またはパロディとして戦後中国文学の系譜に置いて読み、西欧中心的な「世界文学」の構図から脱する新しい「世界文学」を構築する可能性と困難性を検討する。

### 2、茅盾を始めとする同時代中国文学と出会いの意味

堀田善衛の『歯車』は茅盾の『腐蚀』と関わりのあることが知られていないわけではない。この小説は1951年5月に発刊された『文学51』という雑誌の創刊号に掲載され、同年11月、初出に加筆した上で、同作者の『広場の孤独』と合わせて一冊の単行本として中央公論社より出版された。単行本の『広場の孤独』の「あとがき」で、堀田は『歯車』について次のように述べている。

『歯車』は、1946年秋、私がまだ国共内戦のため緊迫して癡癡してゐた上海にゐた頃の生活及びある中国人学生から聞かされた、一種の茅盾論の如きものに端緒を

え、これが47年帰国後もますます胸中で膨れ上がり、息苦しくなって来たので、49年春、瀉血のつもりで書いた。発表は2年後の51年5月の『文学51』。<sup>1</sup>

ここに記される「茅盾論」とは茅盾の論じたものであるか、それとも茅盾を論じたものであるか、定かではないが、堀田が『歯車』の一つの材源として「ある中国人学生から聞かされた……もの」を、わざわざ「茅盾論」に譬えて語るのは、この小説の制作が中国作家の茅盾と何らかの形で関わっていることを、多くの読者に暗示を与えようとしているに違いない。

初めて堀田の『歯車』と茅盾の『腐蝕』との関連性を言及したのは、中国文学研究者の竹内好(1910-1977)である。1952年1月1日付の『日本読書新聞』に掲載された「堀田善衛著『広場の孤独』」という書評で、竹内氏は「この作品(『歯車』一引用者注)と、それにヒントを提供している茅盾の『腐蝕』を比べてみると、いろいろの意味でおもしろい」と述べているが、「題材の関係もあって、今日の読者に、そう切実に訴えないか」と考えているため、議論の深入りを避けた。

竹内好氏に続き、1952年2月25日、「近代文学」、中国文学研究会、「荒地」の三者の共催で開かれた堀田善衛の芥川賞受賞(1951年下半期)の記念祝賀会で竹内好と同じく中国文学研究会の同人である小野忍(1906-1980)は「茅盾の『腐蝕』という小説」が「堀田さんが『歯車』を書く時材料の一つされた」と言っている。<sup>2</sup>さらに、同小野氏は『腐蝕』の翻訳者として、日本語版の初版「解説」(1954年4月13日)で、「この小説が日本人にも強く訴える力を持っている」と説き、その「一つの例証として」、「敗戦後上海でこの小説を読んだ堀田善衛氏がこの小説の構想を氏の「歯車」のなかに取り入れている」<sup>3</sup>と明白に指摘した。

これらの資料を読めば分かるように、『歯車』が発表される際、この小説が茅盾の『腐蝕』と関連していることは既に知られている。しかし、堀田善衛はなぜ、茅盾という中国作家に注目したか、彼と茅盾文学との出会いはいつ頃始まったのか、などのことについて、やはり、10数年後に公表された堀田の回想談を俟たねばならない。1970年、河出書房新社によって出された『現代中国文学』シリーズに収められた茅盾著『子夜』(竹内好訳)の「解説」としての「回想・作家茅盾」で、堀田善衛は次のように語っている。

私ははじめて中国の現代文学に接した、と思ったのは、1941、2年頃に、小田嶽夫氏の訳(抄訳)による『大過渡期』という小説によって、であった。この『大過渡期』は茅盾氏の『蝕』という三部作中の『幻滅』と『動揺』の抄訳であるということである。

<sup>1</sup> 堀田善衛「あとがき」、『広場の孤独』、中央公論社、1951年11月。

<sup>2</sup> 「堀田善衛芥川賞受賞祝賀会の記」を参照、「近代文学」1952年5月号。

<sup>3</sup> 茅盾著、小野忍訳「解説」『腐蝕』、筑摩書房1954年6月、310ページ。

さてこの茅盾作『大過渡期』は、従ってアンドレ・マルロー作『王道』とか、ジャック・シャルドンヌ作『祝婚歌』、あるいはピエール・マコラン作『女たちに蔽われた男』、また『女の学校』を始めとするアンドレ・ジイドの諸作などと並んで、あるいはそれらの西欧の新文学に立ちまじってその頃の読書人たちに供されたものであった。

中国現代文学、あるいは中国古典というものは、いまでも現代日本文学に、世界文学の一環としてのかかわりあるものとして議論され、評価されるまでには至っていないものであるが、当時においてはそれは一層ひどく、いわば何か特殊なものとして差別されていたであろう。

さてところで、茅盾氏のこの『大過渡期』は、西欧の新文学とともに、いわばこみで紹介されたことは、私のような西洋かぶれの文学青年にとっては、一つの仕合せであった。(中略) しかもこの『大過渡期』は、いわば社会小説、あるいは今日のことばで言って全体小説のはしりのようなものであり、社会をトータルに描こうという意思に貫かれたものであった。そこところが、当時、心理に急傾斜をした傾きの多かった西欧新文学とは異なっていて、しかもそれがほかならぬ現代中国に於いて行われているということに、まず、私の注意は引かれたのであった。<sup>4</sup>

引用はあまりに長すぎたが、本稿の主旨に沿って注目に値する三つの要点をまとめて挙げたい。第一、堀田善衛が1941年または1942年頃に茅盾の長編小説『蝕』の日本語抄訳である『大過渡期』を読んだ。これは彼が初めて接した茅盾の作品だけではなく、現代中国文学との最初の出会でもある。第二、茅盾の『大過渡期』が当時、「西欧の新文学に立ちまじって」紹介されたため、「西洋かぶれの文学青年」の堀田善衛は目に留めたが、読んでいるうちに、堀田氏は却ってこの作品に見出す「心理に急傾斜をした傾きの多かった西欧新文学とは異なっている」特徴、即ち「社会をトータルに描こうという意思に貫かれた」小説の書き方に感心させられた。第三、中国現代文学が「世界文学の一環として」見なされていない時代的な雰囲気の中にも、茅盾文学との出会いを通して、堀田善衛の「世界文学」への認識が変わるようになった。

因みに、当時の日本における『大過渡期』及び茅盾文学に対する反響を考察してみる。『大過渡期』の翻訳者は小田嶽夫(1900-1979)であり、出版元は第一書房である。奥付によると、この訳書は3回発行されている。初刷は昭和11(1936)年8月20日、印刷部数は2500部と記される。翌昭和12(1937)年3月1日に同書の改装版を出したが、太田進の調査によると、この「改装」というものは「初刷の装訂と比べて変わりはない

<sup>4</sup> 堀田善衛「回想・作家茅盾」『現代中国文学2 茅盾』、竹内好訳、河出書房新社、1970年10月、381-382ページ。

ようだ」。昭和 14（1939）年 5 月 20 日、同第一書房が「大過渡期」を「悩める支那」に改題して「第二刷一千部」と記したが、太田進が『『第 2 刷』と称するものも、切り貼りによる改題だけで、売れ残りを売ろうとした出版社のたくらみであったという可能性もないわけではない』<sup>5</sup>と指摘している。当時の茅盾文学に対する紹介と評論を見ても寥寥たるものであり、現代中国文学の新鋭研究者を集めた中国文学研究会の中心メンバーである竹内好が「茅盾論」という文章で「茅盾のような作家がもてはやされることは、究竟、文学の貧困を立証する以外に何物もふくまれぬ」と述べ、茅盾の文学全体に辛辣な否定的評価を与え、「もし僕が過褒に陥ったとすれば、それは僕また隣邦の青年と共に好んで糞を食う人種だからである」<sup>6</sup>とまで言っている。このような茅盾に対する日本の受容状況に照らしてみれば、「西洋かぶれの文学青年」と自認している堀田善衛の反応はかなり特異的であると言えよう。

勿論、1970 年代初頭の時点に立った堀田善衛が 1940 年代の堀田善衛を語った回想文を堀田研究の資料として使う時に、ほかの資料、とりわけ 1940 年代に著された一次的な資料を合わせて検証する必要がある。周知のように、堀田は 1940 年慶応義塾大学文学部に在学中、既に詩を書き始めた。1942 年 9 月に学年を繰り上げられて卒業した後、吉田健一（1912-1977）、中村光夫（1911-1988）らの『批評』誌の同人となり、詩を書き続けると同時に、文芸評論の執筆も開始した。1945 年 3 月上海に赴くまで公刊された堀田の文芸評論を調べてみると、『批評』誌に 5 回に亘って連載された「西行論」以外、主に西欧の文学・音楽を論じるものであり、現代中国文学には一言も触れなかった。茅盾と魯迅（1881-1936）の作品から感銘を受けたことがあるとしても、未だ彼の心の奥底に潜んでいるようである。上海で敗戦を迎えて中国国民党中央宣伝部対日文化工作委員会に留用された堀田善衛が執筆活動を怠けず、1946 年 6 月に『改造日報』（上海発行）に発表された「反省と希望」というエッセイの中に、魯迅の言葉を取り入れた。日本へ引き上げた後書かれた小説「被革命者」（『改造文芸』1950 年 1 月号）の結末に、上海にある魯迅の墓に向かう場面を設定し、ある人物の口で「魯迅がいま生きていたら、果たして中共文化人になっているかどうか」という話題を提起している。『齒車』もこの延長線上にある作品であるにほかならない。かくの如き、意識の中に潜在する中国現代文学者及び彼らの作品を魅らして自らの作品の中に取り入れるのは、まさに戦後から再出発した堀田文学の一つの新しい方法となっている。

こうして辿ってみると、1970 年に、堀田が「中国現代文学」を「現代日本文学に、世界文学の一環としてのかかわりあるものとして」議論すべきと提言しようとするのは、

<sup>5</sup> 太田進「『動揺』『追求』の日本語訳について」『茅盾研究会会報』（大阪）第 6 号、1988 年 2 月、10 ページ。

<sup>6</sup> 竹内好「茅盾論」『中国文学月報』第 14 号、1936 年 5 月。ここに付け加えて説明する必要があるのは、竹内好が 1960 年代に茅盾の代表作『子夜』の翻訳に携わり、訳者の「解説」で「当時私の好みは郁達夫など主情的な作家にあったが、茅盾の強烈な散文精神はいつも気にならなかった」と述べ、自らの「茅盾論」を見直している。竹内好「解説」『夜明け前—子夜』（『中国現代文学選集 4 長編小説 1』）、平凡社 1963 年 9 月、399 ページ。

彼の戦後から試みた新しい文学方法に基づいたものであり、彼が目指している新しい「世界文学」の枠組みのなかで自分のこのような文学方法を意味づけようとする考えを現わしたとも言える。

### 3、眼差しと語りとの交錯、そして複線的な構合力

以上の認識を踏まえて『歯車』というテキストを読む際、先ずそれに先行するテキストと見なされる矛盾の『腐蝕』を考察する必要があると思われる。『腐蝕』は日中戦争を背景に、重慶国民党政権下の特務機関の工作を強制される一人の若い女性の日記という形式に託された日記体の長編小説である。日記の書き手である趙慧明は嘗て南京のある大学で学生運動の先頭に立っており、小昭という左翼青年と恋に陥り、同棲生活を送ったが、思想の分岐で二人は別れてしまった。その後、彼女は特務機関に陥れられ、知識人と青年学生を監視・弾圧する側に立たされている。小説は趙慧明の目を通して秘密警察組織の内幕及び国民党支配の暗黒な政治を暴露すると同時に、この「腐蝕」した世界に置かれた趙の内面の苦悩と不安、人格の分裂、そして「腐蝕」の世界から脱出しようとするあがきを描いている。大雑把に言えば、『腐蝕』は社会政治批判的な小説と内面告白の心理小説が混じったところに成り立ったテキストである。

『歯車』は人物の設定においても、物語の展開においても、『腐蝕』と重なるところは多くあるが、堀田善衛は矛盾のテキストを援用しながら独創的な書き換え作業も行っている。これに対して、近年ようやく現れてきた若手研究者陳童君の論文は周到な分析を与えている。陳は堀田が『腐蝕』の第一人称日記体を第三人称の物語に書き換えたところに着目、とりわけ作家堀田の「分身である『留用』日本人の伊能を作品の主人公にしたこと」を高く評価し、「『腐蝕』から『歯車』へ移行する際に新しく入れられた『留用』日本人の視点は、物語の構造に大きな変化を与え、『腐蝕』の主題を深化させた」<sup>7</sup>と説いている。

陳童君の論文のタイトルが示すように、陳の関心は主に「留用」日本人のまなざしに置いてあるが、小説のもう一人の主要な人物、即ち『腐蝕』の趙慧明になぞらえて設定された「秘密警察的な文化機関」の工作に従事する若い女性陳秋瑾も注目に値する存在である。本多秋五（1908–2001）に言及される通り、『歯車』には「陳秋瑾女士が三回長物語をする」ことがあり、単行本のページで数えてみれば、陳女士の話は作品全体の約半分を占めているため、この小説は伊能の視点で貫かれたものではなく、寧ろ、伊能のまなざしと陳秋瑾の語りが交錯することで構成されたのである。陳秋瑾の「長物語」に対して、本多秋五はさらに「国民党の女スパイが、日本人の伊能に、どうしてそんなに心の奥の奥の秘密まで洗いざらい喋るのか。これを日本人同士の関係に置き直してみた

<sup>7</sup> 陳童君「『留用』日本人の〈まなざし〉—堀田善衛『歯車』の生成とその問題意識」『国語と国文学』（東京大学国語国文学研究会）、2013年6月号、60–61ページ。

ら、よほど不可解な現象であろう」<sup>8</sup>と訝しげに語ったが、「日本人同士の関係」を超えて、即ち一国の国語環境を離れたところに、伊能と陳女士との対話関係を成り立たせるのは、堀田善衛の意識的な試みであるに違いない。若し、茅盾が日記体における第一人称の視点に、小説の書き手（作者）の視点を密に加える<sup>9</sup>ことによって、西洋型の内的閉鎖的な心理小説を開放させようとするなら、堀田善衛が茅盾の『腐蝕』を先行テキストとして意識しながら、敢えて日記体を捨てたのは、彼が『腐蝕』のような社会的な心理小説と異なる複雑な人間の絡み合う「関係小説」と「思想小説」を求めているからである。このような意味で、小説『齒車』は一つのユニークな「茅盾論」であると言ってもよかろう。

#### 4、終わりに

『齒車』の冒頭には伊能の視点から、「終戦のあくる年」と記しており、テキスト内の時間はその時点から始まる。それ故、人物設定やストーリーの展開などが『腐蝕』と多く重なっているにも拘らず、執筆の時間においても、物語の時間においても、恰も『腐蝕』の続編に当たる。

偶然ではないと思われるが、戦時下に書かれた『腐蝕』も戦後、とりわけ国共内戦が激化状態となっているうちに、広く読まれるようになった。戦後国民党政府への不満を持つ多くの読者は『腐蝕』から共感を覚えるに違いないが、共産党にとって国民党に攻撃する恰好の材料であるため、蘇中、太岳、華北、東北の各「解放区」が争ってこの小説を大量に刷っている。<sup>10</sup>1950年になって、有名な映画監督の黄佐臨により映画化され、初めは好評を受けたが、間もなく、小説原作も映画も「女特務」に同情し過ぎたと見なされたため、当時の「反革命分子肅清運動」の精神に反していると批判された。

『腐蝕』の続編に当たる『齒車』は、若しこの時期の中国文学の流れのなかに置き直して読まれるなら、どのように評価されるか。歴史上の「若し」に答えることはできないが、その「若し」を考えるのは無意味ではないと思われる。1950年代の後半から、アジア・アフリカ作家会議運動の先頭に立っている堀田善衛は何回か中国を訪れ、茅盾を始めとする中国文学者と親交を結んだが、彼の作品、とりわけ中国を題材とする代表的な作品は一切中国語に訳されていなかったようである。このような意味で、今、『齒車』を含む堀田善衛の中国題材の作品を「世界文学」の枠組みに置いて読む必要性がもっと感じられる。というのはこれらの作品が今なおわれわれに、「どのような世界文学を目指すべきか」ということを、問い続けているからである。

<sup>8</sup> 本多秋五『物語 戦後文学史』（下）、岩波書店1992年5月、18ページ。

<sup>9</sup> 是永駿「『腐蝕』における文体と構造」、初出：『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念 中国語学・文学論集』、1983年12月；氏著『茅盾小説論』、汲古書院2013年1月、87-88ページを参照。

<sup>10</sup> 鐘桂松「『腐蝕』—従小説到電影」『書城』2011年7期、63-64ページを参照。